

アーサー・ヤング『北イングランド6ヶ月旅行記』の風景における有用性

“Utility” in Arthur Young’s *A Six Months Tour through the North of England*

今村 隆 男

Takao Imamura

2006年10月5日受理

アーサー・ヤング (Arthur Young, 1741-1820) は、18世紀のイギリスを代表する農業改革家の一人であるが、自らの農業経営の実践における失敗や一部の農地観察記の未熟さゆえに、現在の評価は決して高いとは言えない (Mingay 3-4)。しかし、本論で取り上げる、農地観察記の中に含まれるヤングの風景描写は、18世紀後半の国内旅行ブームの中で文人や博物学者達によって書かれた旅行記にも匹敵するものであると言える。ヤングが農業改革家として活躍した時代は、イギリス国内でのターンパイク (幹線道路) の整備などを背景にして、新しく経済力をつけてきた階層の人々の間に国内各地へのピクチャレスク (picturesque)・ツーリズムが流行した時代であったが、ヤングもその生涯において各地へ観察旅行を行ってその記録を出版している。本論で取り上げる『北イングランド6ヶ月旅行記』 (*A Six Months Tour through the North of England: Containing, an Account of the Present State of Agriculture, Manufactures and Population, in Several Counties of this Kingdom*, 1770) は、ヤングが1768年に行ったイングランド北部への長期にわたる農地観察旅行の結果をまとめて4巻本として出版したもので、書簡集の形式を取っているこの作品の第3巻の第17書簡には、ピクチャレスク・ツーリズムの目的地として当時から非常に人気の高かった湖水地方への観察旅行の記録が収められている。

『北イングランド6ヶ月旅行記』は、農地や肥料、家畜、荒地、貧民、労働賃金、などについての具体的なデータを挙げた、旅先の各地の農業分析が中心となっているが、第17書簡では、その中に織り込まれている、脱線部分であるはずの湖水地方の風景描写は極めて詳細で、農業実践に関わる観察記録よりも長い。少なくとも湖水地方の観察に関しては、ヤングの旅行は農地観察よりも、むしろ風景美を楽しむためのピクチャレスク・ツーリズムが優先されていたと言ってもよいだろう。第17書簡に挿入されているヤング自身による3枚のスケッチは農地を描いたものではなく、ピクチャレスク・ツーリストがこぞって訪れた滝の風景美を描き出したものであり、当時の観光目的の旅行記

やガイドブックのスケッチと何ら変わるところがない。

ヤングが湖水地方を訪れた前年の1767年には、最初の湖水地方旅行記と言えるブラウン (John Brown) の『カンバーランドのケズウィックの湖の風景』 (*A Landscape of the Lake at Keswick in Cumberland*) が出版され、ヤングと同じ1768年にはギルピン (William Gilpin) が『版画論』 (*Essay on Prints*) を出版し、その中で「ピクチャレスク」という語の意味を初めて定義して風景美学の論議が始まっている。さらに、翌1769年には著名な詩人グレイ (Thomas Gray) が湖水地方を訪れて旅行記を書き、この地へ多くのツーリストを招くことになる。即ち、ヤングの湖水地方観察旅行は、この地へのピクチャレスク・ツーリズムのまさに草創期に行われたのである。これ以降、夥しい数のツーリストが湖水地方を訪れ、多くの旅行記やガイドブックが書かれていくことになるが、ヤングの『北イングランド6ヶ月旅行記』は、その先陣を切るものの一つとして非常に興味深い。農業改革家ヤングの風景描写がピクチャレスク時代に出版された他の旅行記などの記述と異なっている点は、風景美の中に見られる有用性 (utility) の尊重であると思われる。そこで本論では、この有用性への視点に注目しながら、ヤングの風景描写の特徴を分析してみたい。

まず、『北イングランド6ヶ月旅行記』第17書簡における風景描写の概要を確認しておきたい。湖水地方を扱ったこの書簡の中で、ヤングは北部のカーライル (Carlisle) から東部のケンダル (Kendal) へと湖水地方を横切り、その途中でダーヴェント (Derwent Water)、アルズウォーター (Ullswater)、ウィンダミア (Windermere) と3つの湖を巡って、その周辺の風景を描写し、最後にこの地域全体の風景の特徴をまとめている。ヤングの風景描写は、絵画 (“painting”) を描写の基礎に据えて「ピクチャレスク」や「円形劇場」 (“amphitheatre”) などのピクチャレスク美学の専門用語を多用しながら風景美を描き出し、さらに “There are many edges of precipices, bold projections of rock, pendent cliffs, and wild romantic spots, which command the most delicious

scenes, but which cannot be reached without the most perilous difficulty....” (Young 126) などの文章に明らかなように自然への恐怖心を強調するなど、ブラウンに始まる湖水地方旅行記の基本的なパターンの中に収まるものとなっている。

取り上げられている3つの湖の中ではダーヴェント湖に関する部分が最も長くなっているが、ブラウンも焦点を当てたこの湖は、ヤングがこの地を訪れたピクチャレスク・ツーリズム初期に特に脚光を浴びていた場所である。湖を見下ろす高台 (Walla Crag) からの眺望や夜間の湖畔散策を楽しんだブラウンとは異なり、ヤングはダーヴェント湖を船で巡りながら適当な場所を探して時々上陸しての風景美を楽しむという方法で鑑賞した後、次のようにケズウィックの風景を総括する。

Keswick, upon the whole, contains a variety that cannot fail of astonishing the spectator: The lake, the islands, the hanging woods, the waving inclosures, and the cascades are all most superlatively elegant and beautiful; while the rocks, cliffs, crags, and mountains are equally terrifying and sublime. There cannot be a finer contrast. (Young 125-6)

ヤングがダーヴェント湖を「イングランド中で有名なケズウィックの湖」(Young 113)と表現していることを始めとし、この引用箇所のように「エレガントで美しい」面と「恐ろしくて崇高な」面に分けて風景美を捉えようとしている点等にも、ブラウンによる旅行記の影響が認められる。特に、クロード・ロラン的な穏やかな「美」、サルバトール・ローザ的な「恐怖」感という、ブラウンがダーヴェント湖の風景美の三要素としたもののうちの二つを取り上げ、両者の対照性を際立たせようとした意図は明らかである (Brown 7-8)。

しかし、ヤングの旅行記を通して、風景美を表現する言葉の意味の使用基準は明確であるとは言いがたい。“The surrounding hills, rocks, and scattered pendent woods, are all romantic and sublime, and tend nobly to set off this most exquisite touch of rural elegance.” (Young 118) や “Nothing can be fancied more grand, more beautiful, or romantic.” (Young 119) といった文章にも明らかなように、“picturesque”, “romantic”, “sublime”, “noble”, “elegant”, “beautiful” や、さらには “pleasing”, “wild”, “delicious”, “grand” など、ヤングの作品以降、徐々にその意味が定められて「美」と「恐怖」、さらに「ピクチャレスク」の範疇に分類されてゆく言葉が、様々な組み合わせで、或いは単独で再三混用さ

れており、一貫性無く用いられている感を免れない。また、“inimitably beautiful” (122) など、表現に窮していると思われる箇所も少なくない。このあたりは、風景絵画をベースにしたブラウンの表現パターンから抜け出して、眼前の風景を独創的な表現で描き出そうと苦勞するヤングの様子が読み取れる。この後、ヤングが使用した言葉の多くはお決まりの表現 (picturesque jargon) となってピクチャレスク旅行記や風景詩などに頻出する一方で、各々の言葉の正確な定義についての議論が起り、ピクチャレスク美学は進展してゆく。また、ヤング自身が最後に断わっているように、例えばアルズウォーターが“Hulls Water”となるなど、地名の多くは耳で聞いた通りに表記されていて、のちに確定される綴りが用いられていないことから、この地域のツーリズムや旅行記は未だ初期の段階で定着するには至っていないことがわかる。

ヤングの具体的な風景描写の中で特に注意を引くのは、植林の風景の持つ有用性 (utility) への評価である。まず、ダーヴェント湖に関わる文章の中の、湖内にある小島の描写を取り上げてみたい。ダーヴェント湖には大小あわせて5つ小島があるが、ブラウンとグレイはこれらの小島には殆ど関心を向けていない。ブラウンは「(ダーヴェント湖は) 木々のある多様な小島で飾られている」(Brown 6) とだけ述べており、グレイには言及がない。ところが彼らとは異なり、ヤングは湖内の小島を湖の風景美のアクセントと解釈し、各々の名前を挙げて説明しているが、これらの小島への関心は後のツーリストに大きな影響を与えたと言える。その中でも最も大きい牧師島 (Vicar's Island、現在の Derwent Isle) と伯爵島 (Lord's Island) は、ウィングダーミアのベル・アイル (Bell Isle) と並び、ヤング以外にも多くのツーリストが特に注目することになる島であるが、時代を追ってこれら島の描写の変遷を追うことは、この地域の風景の変化を考える上でも興味深い。ヤングによれば、牧師島は「島の一方の側に木々のクランプ (clump) があり、その下に一軒の家が建っている」島であるとしか記されておらず、のちの大きな景観の変更の兆候は現れていない。伯爵島については、すでに「スコットランド樅が植林されて」おり、その木々は湖岸より「非常に好ましい姿で捉えられる」(Young 114-5) とヤングは述べている。

ヤングの後、1772年にこの地を訪れて旅行記を書いたペナント (Thomas Pennant) によれば、これらの島々は「緑の芝や、様々な木々で覆われていた」(Pennant 40)。翌1773年の湖水地方旅行に基づいた旅行記の中で、ハチンソン (William Hutchinson) は初めて牧師島を訪れた時に、青々としたシカモア (西洋楓) が離れ屋を覆っている「ピクチャレスク」な風景の美しさに目を留めるが、次に訪れた時には島の所有者の「強欲」(avarice) のせいでシカモアの木々が切り倒さ

れることによって「この風景美は損なわれてしまった」、と嘆いている (Hutchinson 134)。よって、1772年から1773年にかけての1年間に、牧師島の木々の伐採が始まったことになる。1778年になると、見るだけでは満足できなくなったツーリストの中から牧師島を購入する者が現れ、この島は別荘地化されてさらなる在来種の木々の伐採と外来種の植林が進み、大砲を備えた砦などが築かれて「海賊ごっこ」が行われるという非常に嘆かわしい状態になってゆく (Ousby 163-5)。

ベル・アイルについても、ヤングとハチンソンの描写は対照的である。1773年にウィンダーミアを訪れたハチンソンは、ベル・アイルの「僅かな自然美」が新しく別荘を建てた所有者による「整然と並べられた醜い樅の木の列」などの「(土地)改良」(“improvement”)によって、すでに「傷つけられ歪められてしまっている」(Hutchinson 187)ことを激しく批判しているし、²⁾78年に出版された湖水地方ガイドブックのベストセラー『湖水地方案内』(Guide to the Lakes)の中でウェスト(Thomas West)も、ヤングやペナントが見た「自然のままの美しい状態」は失われてしまっていて、「ひっそりと建っていたコテージやシカモアの林はもう無い」と嘆いている(West 63-4)。ヤングは、この島についても、湖岸からの風景を紹介して「均一でない地表が極めてピクチャレスクだ」などと、多様な風景美への賞賛の言葉を惜しんでいない(Young 138)。

ハチンソンは、美観の視点から樹木の伐採や外来種の植林に反対しているのであるが、風景の有用性よりも、生態系への配慮にも通じる自然美の尊重の萌芽がハチンソンには認められると言ってよいだろう。そして、このような視点は、1790年代になると雑草の蔓延る風景にすら自然の持つエネルギーや美しさを見出そうとするプライス(Uvedale Price)やナイト(R. P. Knight)らのエコロジック的と言える自然観によって引き継がれてゆくことになる。

ヤングは、湖岸沿いの風景を次のように描いているが、ここにも彼の植林観が読み取れる。ダーヴェント湖の南岸の風景は、次のように記される。

Sailing along the shore it leads you under a hill most beautifully spread with wood; it is covered thick with young timber trees, which grow down to the very water's edge. You next enter a little bay, and look upon a small round hill, covered with wood, inimitably beautiful.

(Young 122)

「若い材木になる木」とは、彼の旅行した時期、この地域に有用性ゆえに大量に植林されていたスコット

ランド縦であろう。³⁾ここでもヤングは、その植林の森は丘の上に「最も美しく広がっている」と説明している。ペンリス(Penrith)からアルズウォーターへのアプローチについても、ヤングは、

Returning to Penrith, our next expedition was to Hulls Water, a noble lake, about six miles from that town: The approach to it is beautiful; the most advantageous way of seeing it is to take the road up Dunmanlot Hill [=Dunmal-lard Hill], for you rise up a very beautiful planted slope, and nothing of the water till you gain the summit, when the view is uncommonly fine.

(Young 127)

と描写しているが、彼が登って行ったのは「非常に美しく植林された斜面」であると表現されている。ヤングにとって、あたりに広がる植林された木々は問題なく風景美に貢献しており、植林が景観を害しているという嫌悪感は認められない。

ヤングが植林風景を批判的に描写しているのは、ただ一箇所、「どこから見ても見事な(眺望の)対象である」植林された丘陵が、「木々の間を曲がりくねって流れる小川」や「滝の轟き」といったピクチャレスクの要素に彩られているにもかかわらず、「スコットランド樅の二本のストライプによって横切られており、木々の緑の色合いが変わってしまっ結果的に景観の統一性が破られている」(Young 128-9)ところだけである。優先されるべきは「景観の統一性」であって、いかに有用性があるとも「景観の統一性」が損なわれれば、それは風景美にとって瑕疵となるのである。しかし、他の部分の描写にも明らかなように、ヤングにとっては、風景における有用性とは一般的に「景観の統一性」を演出しうるものであって、それゆえに有用性を尊重するという彼の基本的な姿勢に変わりはない。

風景の有用性の問題を考えるために、当時、湖水地方の森林風景の中に点在していた鉱山の描写を次の例として取り上げてみたい。ヤングは、ダーヴェント湖の周辺で採れた黒鉛(black-lead)について、“Advancing with the coast you next land at the lead mines, which, if you have a taste for grotto work, will entertain, as a boat may be loaded with spar of various glittering and beautiful kinds.... (Young 122)と述べて、「美しくきらめく様々な種類の鉱石」を積んだ荷船の見える風景を楽しんでおり、鉱山が地域にもたらす否定的側面には一切関心を示していない。⁴⁾ここで、ヤングと比較してみたいのはギルピンの描写である。ギルピンは、1773年に書かれた『湖水地方紀行』(Observations, Relative

Chiefly to Picturesque Beauty, Made in the Year 1772, on Several Parts of England, Particularly the Mountains, and Lakes of Cumberland, and Westmoreland)の中で、同じ黒鉛の鉱山を遠方から眺めて“I could not help feeling a friendly attachment to this place....” (*Cumberland* 205)と述べ、細部にこだわらず全体的眺望の印象を肯定的に描き出している。同様に1770年に書かれた『ワイ川紀行』 (*Observations on the River Wye*)においては、石炭が荷船に積み込まれている風景を、港を行き来する様々なもの、港の背景、積荷作業や船のエンジン、周囲の厳肅さなど、風景の中の多様な要素を含めて一つの「ピクチャレスク的な集まり」 (“a picturesque assemblage” *Wye* 22)としてギルピンは賛美している。彼自身が言うように、「寺院 (廃墟)、城、村、尖塔、鍛冶場、工場、橋」などの建築物は全てピクチャレスク美に貢献しうるものであるが、それは、その有用性ゆえではなく、風景内の多様な要素が調和・統一性を持ってまとまっているからに他ならない (*Wye* 14)。ヤングとは異なり、ギルピンにとって有用性は風景美を高めることはないのであり、ピクチャレスクは有用性とは全く無関係に判断されるべきものである。後期のギルピンは、風景美にとって有用性はむしろ憂慮されるべきものと考えようになってゆくが、さらに19世紀のワーズワスによる鉱山の描写になると、鉱夫たちのもたらす地域の風紀の乱れなどの不道德性や平安な生活の喪失、環境の汚染や騒音などが批判の対象となり、風景美に関して有用性の否定的側面ばかりが強調されてゆく。

一方で、ヤングは風景の有用性を尊重しながらも、自然の美しさと比較すれば人間の業はいかに些細なものかを強調しており、その後、次のように続ける。

It is the contemplation of such amazing scenes, that fills the soul with admiration and almost overpowers her faculties: One is lost in wonder at the omnipotence of a Being, the splendor of whose existence exhibits itself in works of such endless variety. (Young 127)

自然の風景美の持つ「果てしの無い多様性」は神のなせる業の現れであり、ヤングにとって風景美に魅せられることは神の御力に接することである。ダーヴェント湖の北に聳えるスキドゥ (Skiddaw) の周囲の景観を、“sublimely romantic”や“dreadful sweeps”などの表現で描き出し、それらは「自然が創造した作品」 (“the work of nature”) であるとして、ヤングはそこに風景美を見出しているが、ヤングにとっても「崇高」の源は古来から人間が持ってきた自然への恐怖心やその自然を造った神への畏怖であり、彼がそれを強

く感じていることは明らかである (Young 125)。ところが、ハチンソンらにとっては、神の創造した自然を賞賛する視線は、人工 (Art) よりも自然 (Nature) を優位に置く考え方に通じるものであり、これが植林された外来種の林よりも在来の自然林を尊ぶ姿勢に繋がっていた。しかし、ヤングはその矛盾を意識することはなく、彼にとっては人工と自然の両者は問題無く両立しているように思われる。ハチンソンは、人工によらない自然美を、ヤングと全く同じ表現を使って “the work of nature” (Hutchinson 180) と賛美しながら、それが外来種の植林や異国風の建築物、野菜畑などの人工性によって損なわれていくことを嘆いていたが、これはヤングの風景観とは相容れないものであった。

ヤングとハチンソンの自然観の相違を考える時、ヤングが農業推進者の立場にあったことに加え、ヤングの旅行記が景観の大きな変化が起こる以前に書かれたものであり、人工と自然の対立はまだ深刻ではなかったことも考慮する必要があるだろう。しかし、ヤングの15年後になると、同じ農業改革家マーシャル (William Marshall) は『植林論』 (*On Planting and Ornamental Gardening*, 1785)において、「人間の手の入っていない自然」 (“neglected nature”) よりも「人間の手の入った自然」 (“cultivated nature”) の方を迷い無く上位に置いているが、それは、神の創造した自然は人間が手を加えることで完璧なものとなりうる、という確信から来ている (Marshall 1 250)。これは、繰り返し「人間の手の入っていない自然」の美しさに言及したプライスとは、対極にある考え方であろう。即ち、時代が降って材木種の植林や鉱山開発が広がるにつれて、有用性に関する姿勢は二分されてゆくのである。

もう一つ、ヤングからハチンソン、プライスらへの変化を考える際に考慮しておかなくてはならないことは、自然における有用性の内容の変化であろう。即ち、ヤングの次の時代になると、公共的に有用なものか、或いはその有用性は私的なものなのかが問われるようになってくる。かつて植林の目的の中心は、ポープ (Alexander Pope) の「バーリントン伯爵への書簡詩」 (“To Richard Boyle, Earl of Burlington”, 1731) にもみられるように (177-90)、国家の海軍に艦船の用材を提供する等という公共的なものが主であったが、18世紀が進むにつれて次第に私利私欲のための植林が多くなってゆく。産業革命の進展を背景に材木の価格は上昇し、植林は蓄財の有力な手段の一つとなっていった。そのため、マーシャルのように領地への落葉松の大規模な植林を帝国海軍のためと言い切る者はまれになり、有用性の持つ公共性は揺らいでいったと考えられる。このような変化を背景に、有用性は風景美から切り離されてゆき、エコロジー的自然観が

登場してくる土壌が用意されてゆくのである。

Notes

- 1) “picturesque jargon”を多用した典型的な例としては、ジョン・スコット(John Scott)の風景詩『アムウェル』(*Amwell, A Descriptive Poem*, 1776)などがある。
- 2) 拙論「ピクチャレスクと風景美——旅行記、庭園論における森林と雑草の描写について」『和歌山大学教育学部紀要(人文科学)』(第56集 2006年) 102参照。
- 3) ヤングの時代に湖水地方に植林されていたのは、主にスコットランド樅(Scotch fir)であるが、80年代後半になると、より早く成長し、より用途の広い落葉松(larch)がそれに取って代わって行き、19世紀に入るとワーズワス(William Wordsworth)らによる烈しい落葉松の植林批判を招くことになる。
- 4) 18世紀に発見されたボロウデイルの黒鉛鉱山は、鉛筆や羊の印のためなどに使われていたが、19世紀の前半に閉山になった。つまり、この黒鉛鉱山の歴史はピクチャレスク・ツーリズムの歴史にほぼ重なっている。

Works Cited

- Gilpin, William. *Observations on the River Wye, and Several parts of South Wales, &c. Relative Chiefly to Picturesque Beauty, Made in the Summer of the Year 1770*. London: T. Cadell Jr. and W. Davies, 1782.
- . *Observations, Relative Chiefly to Picturesque Beauty,*

Made in the Year 1772, on Several Parts of England, Particularly the Mountains, and Lakes of Cumberland, and Westmoreland. London: R. Blamire, 1792.

Gray, Thomas. *The Poems of Mr. Gray: to which are Prefixed Memoirs of his Life and Writings*. Ed. William Mason. London: Stonegate, 1775.

Hutchinson, William. *An Excursion to the Lakes, in Westmoreland and Cumberland, August 1773*. London: J. Wilkie, 1774.

Marshall, William. *On Planting and Rural Ornament: a Practical Treatise*. London: J. Dodsley, 1785.

Mingay, G. E., ed. *Arthur Young and his Times*. London: Macmillan, 1975.

Ousby, Ian. *The Englishman's England: Taste, Travel and the Rise of Tourism*. Cambridge: Cambridge U. P., 1990.

Young, Arthur. *A Six Months Tour Through the North of England: Containing, an Account of the Present State of Agriculture, Manufactures and Population, in Several Counties of this Kingdom*. 2nd ed. 4 Vols. London: W. Strahan, 1771.

West, Thomas. *Guide to the Lakes: dedicated to the Lovers of Landscape Studies, and to All Who Have Visited, or Intend to Visit the Lakes in Cumberland, Westmorland, and Lancashire*. London: Richardson and Urquhart, 1778.